



士別ロータリークラブ会報

創立 1960・3・24 RI第 2500 地区

Vol. 14 No. 2404

2012-2013年度国際ロータリーのテーマ



例会場／士別グランドホテル
 例会日／毎週月曜日 12:10～13:10
 事務所／士別グランドホテル TEL 0165-23-1234
 会長／尾崎 学 副会長／千葉繁夫
 幹事／泉谷 勇
 URL <http://www.douhoku.jp/sibeturc/>



士別市立「あいの実保育園」と士別RCが創立50周年記念事業に寄贈した遊具

2012-2013年度士別ロータリーのテーマ
奉仕の心を大切に 平和の絆を広げよう

第2486回例会 2012年10月29日(月)

今日のプログラム ・夜間例会

前回(10月22日)の記録 ・普通例会 ・会員卓話

司 会 坂口芳一 会場監督
 斉 唱 奉仕の理想
 本日の出席 出席率 会員52人 出席42人 出席率 83.77%
 本日の欠席 加藤 博、国森和麿、鈴木 勉、佐藤和彦、千葉繁夫、野 英俊、藤吉敏博
 深尾幸夫、松塚信雄、山本俊一
 メークアップ
 ビジター・ゲスト
 ニコニコBOX 三野博司(新築祝)

累計151,000円

例会予定

■10月例会日 【職業奉仕月間・米山月間】

- 10月1日(月) 例会、理事会
- 10月8日(月) 休会(法定休日: 体育の日)
- 10月15日(月) 移動例会(士別市立図書館)
- 10月22日(月) 例会
- 10月29日(月) 夜間例会

■11月例会日 【ロータリー財団月間】

- 11月5日(月) 例会、理事会
- 11月12日(月) 例会
- 11月19日(月) 例会
- 11月26日(月) 夜間例会

■会務報告

…

…尾崎 学会長

●さる16日から18日まで、士別商工会議所とみよし商工会との交流会に参加して参りました。この事業は昨年、みよし商工会から訪問を受け今年には士別からも交流を深めたいとのことで、17名で訪問いたしました。当クラブメンバーから千葉会頭をはじめ8名で行って来ました。

最初に、みよし市役所を表敬訪問し、小野田副市長や鳥居商工会長らと懇談し、みよし市や経済界の状況をそれぞれ説明を受けました。

みよし市役所は今年の5月に新庁舎が落成し、特に環境の配慮と防災設備においては高い評価を得ており、省エネや免震装置、災害対応など東海沖地震に備え最高のシステムを取り入れており、全国各地より視察に来られているようです。

新庁舎は地上7階、延床面積1万平方メートルを超えており、外構工事を含めて総工費約27億円との説明がありました。

また、豊田市の商工会議所、法人会の役員との交流会も行ない、私たちが昔、青年会議所会員時代のメンバーとも、親しく懇親を深めました。また多くのメンバーがロータリークラブの会員であり、その中の一人が今年、豊田東ロータリークラブの会長であり士別との情報交換を期待しております。これからも「みよし市」と「豊田市」との民間交流を深めていければと思っています。

●昨日は、市内各小学校の学芸会が行なわれ出席してきました。今年で閉校になる武徳小・下士別小・中多寄小と3校をまわってきました。子供たちは最後の学芸会であり、力強く頑張っていました。家族の方や地域の方々も子供たちに心温まる声援をおくっていました。

今は各学校の児童数は15名から20名程度ですが一番多い昭和30年代は、200名から250名の子供たちが在籍しており、母校の歴史を振り返っていました。

●最後になりますが、先日の新聞に今年の北海道産業貢献賞を受賞される方々が発表されました。その中に会員であった、故菊地博士別観光協会会長も選ばれていました。生涯をかけて士別市の観光イベントの推進に尽力され、私たちも彼の功績を称えたいと思います。只、元気で受賞できなかったことが残念でなりません。彼の思いを、これからの観光協会の発展のために頑張っていくてはならないと思います。

■幹事報告 …

…泉谷 勇幹事

【着通信】

・国際ロータリー第2500地区より北見地区大会のお礼文

・士別市よりロータリー文庫寄贈のお礼

■会員卓話

近藤峯世会員

今から14、5年前、北海道産のシナの木をロータリーでスライスして単板にしていました。天然林の伐採からトドマツやカラマツの人工林の伐採の方へシフトしていく中で、原材料のシナの入手が難しくなりました。

ある商社の方がインドネシア、フィリピンなどで生えている豆科の植物をシナの木単板の代わりに使ってはどうかと提案をいただきました。

それからたびたび、インドネシア、フィリピンの方へ開発も兼ねて交渉に行きました。私が訪れる場所は本当に山奥の貧しい山林地域です。

ひとつ例をとればフィリピンのクマカというマニラから車で道なのかよくわからないところを南に14、5時間走るとある小さなまちの木工場を訪れた時です。

そこにはちゃんとしたホテルもレストランもなく、1週間ほど生活しました。住民の方の家に泊めていただきました。電気のガスも水も家も、生まれた時からすべてが当たり前のように用意された環境の中で育った私たちには、当時の東南アジアの貧困地域では、想像もつかないような暮らしぶりでした。

ただ当時から、今でも不思議に感じる場所があるのですが、日本人には想像もつかないような貧困の中で暮らしている子どもたちですが、その目の輝きはものすごく美しく、どうしてそんなにキラキラしているのか思っています。

子どもたちは好奇心も旺盛で、そういう子どもたちと触れ合うのも楽しみでした。いろいろ話をすると、妹が先月死んだとか、生まれてから一度もお父さんを見たことがないとか悲しい話なのに、子どもたちは楽しそうに話をしてくれます。日本のようにきちんとした医療制度もありませし、小学入学前や赤ちゃんのうちに死んでしまうこともごく当たり前で慣れっこなのか、そんなに悲劇とは受け止めていないようにも見えました。

今日、新聞やメディアは不景気に関連した暗い話が連日のように報道されています。我々のモチベーションもずっと下がったまま何年も続いています。

冷静に考えれば、この不景気で飯が食えなくて飢え死にしたというのはたまにはあっても、基本的には医療が受けられないとか、赤ちゃんが突然死ぬとかはほとんどないと思います。

東南アジアを往来していると、もうかっているかいけないかという、そういうことだけで心の幸せのレベルを図るのは人間の悪いクセなのでと、そんな気がしています。

逆にこういう時代だからこそ、見直してはとも感じています。混とんとしている世の中ですけど、そういうときにこそ笑顔を絶やさず、また好奇心をもって行動するべきではないかと思っています。